捃拾帖

三

A 00
6010

A00-6010

安政四歳次丁巳仲夏翻刻

NATUURKUNDIG HANDBOEK
VOOR
LEERLINGEN
IN DE
HEEL- EN GENEESKUNDE
VAN
J.N. ISFORDING.

理學入門

福島 信夫古作藏梓

歐羅巴人原譔
侯官林則徐譯
邵陽魏源重輯

英吉利國部

海國圖志

宕陰鹽谷先生
逢谷箕作先生 仝校

青藜閣發兌

B 61009

御書物所

古本賣買

御不用之御書物御拂ニ成度候ハヾ高直ニ買取可申候
御用之節ハ御知らせ可被下候

京都三条通寺町西へ入北側

丸屋善兵衛

神書	佛書	儒書	醫書
歌書	詩集	俳書	軍記
唐本	法帖	写本	繪本

御書物所

名古屋本町八丁目

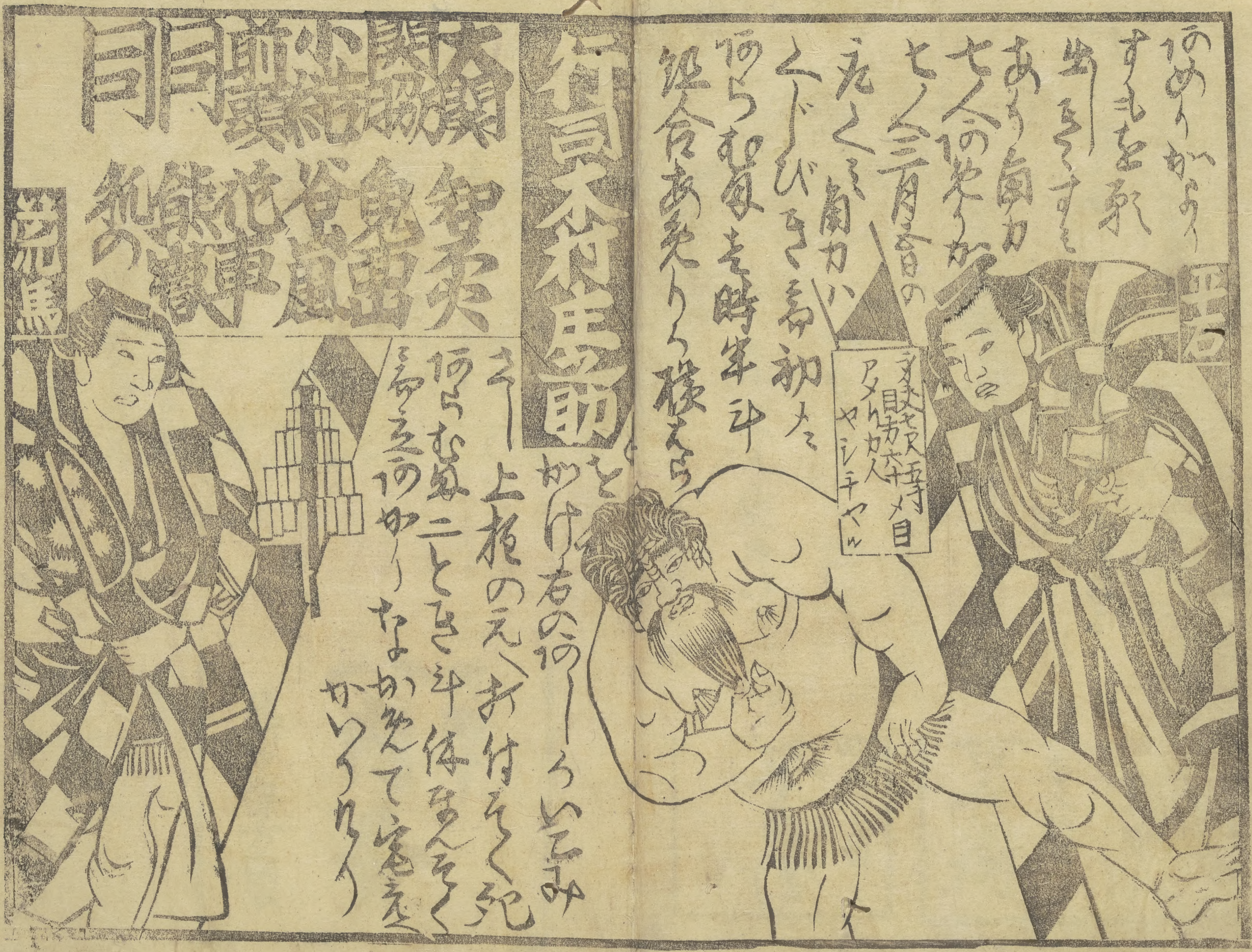
菱屋平兵衛

Ouwer,
Magnesia.

[illegible]小児五疳虫おさへ
マグ子シア煎餅
けいれん腹痛等によし

秋の野を
こめる草花を
たをりもて
すきぬるまゝに
まさし
さよく

清篤



のめりかへり
すもふを承れ
出しますすも
あら負力
七人の外から
七人三月吉日の
えくゝ負力ハ
くどびき弟初たゝ
何らむ年を時半斗
組合あえりく様える
平石
身長七尺五寸
目方六十〆目
アメリカ人
ヤシテヤル
何曽木村生馬助
大関
関脇
小結
前頭
同
同
智天
鬼雷
谷風
花甲
熊嶽
外の
荒馬
とかけ右のゆのーろいとみ
さし上様のえへおけそく兜
何らむ年二とを斗体なんそく
命之のかーなかかえて宅え
かいつり

神皇臨宇二千五百九年
推古改暦一千二百五十七年
安政七年
庚申
西暦一千八百六十年
元日即我去年十二月九日日曜

蔵六巖大政 作下

石首大家

（大）正 丙寅 月ヨウ 立春十三日
三 乙丑 木ヨウ
閏三 乙未 土ヨウ 立夏十五日
六 癸亥 水ヨウ 十五日 翌暁月ソク 立秋廿一日
九 辛卯 日ヨウ 立冬廿五日
十一 庚寅 水ヨウ 冬至十日 小寒十ノ廿五日
十二 庚申 金ヨウ 大寒十二ノ十日 明年立春廿五日

其正月 （小）二 丙辰 水ヨウ 春分廿八日
四 乙丑 月ヨウ
五 甲午 火ヨウ 夏至三日
七 癸巳 金ヨウ
八 壬戌 土ヨウ 秋分九日
十 辛酉 火ヨウ

土旺 四季 三ノ廿七 六ノ二 九ノ七 十二ノ六
アキノ方 申酉ノ間
江 楊

御所御すき
大内香
藤原保方製

京
北梅舎文星大人撰

十ゴヤ

小梅舎

安政七年歳次庚申 須弥界暦略書 凡三百八十四日

月	節気	朔	時刻
正月大	立春 十三日 / 雨水 廿八日	朔丙寅	夜四ッ時 / 暮六ッ時
二月小	啓蟄 十三日 / 春分 廿八日	朔丙申	夕七ッ二分 / 夕七ッ七分
三月大	清明 十四日 / 穀雨 三十日	朔乙丑	夜四ッ一分 / 明六ッ六分
閏三月大	立夏 十五日	朔乙未	夕七ッ
四月小	小満 朔日 / 芒種 十六日	朔乙丑	明六ッ八分 / 夜五ッ四分
五月小	夏至 三日 / 小暑 十九日	朔甲午	昼八ッ / 朝五ッ六分
六月大	大暑 六日 / 立秋 廿一日	朔癸亥	今暁八ッ一分 / 夕七ッ四分
七月小	処暑 七日 / 白露 廿二日	朔癸巳	朝五ッ五分 / 暮六ッ八分
八月小	秋分 九日 / 寒露 廿四日	朔壬戌	今暁七ッ九分 / 朝四ッ六分
九月大	霜降 十日 / 立冬 廿五日	朔辛卯	昼九ッ九分 / 昼九ッ七分
十月小	小雪 十日 / 大雪 廿五日	朔辛酉	朝四ッ二分 / 今暁七ッ五分
十一月大	冬至 十日 / 小寒 廿五日	朔庚寅	夜四ッ五分 / 夕七ッ二分
十二月大	大寒 十日 / 酉年立春 廿五日	朔庚申	朝五ッ六分 / 今暁八ッ八分

歳徳 申酉之間
金神 辰巳 方

天赦	十方暮
正月十三日	正月十九日
三月十四日	三月廿日
五月朔日	四月廿日
七月十六日	六月廿二日
九月十八日	八月廿三日
十月四日	十月廿四日
十二月五日	十二月廿五日

甲子	天一天上
二月廿九日	正月廿八日
閏三月晦日	三月廿九日
六月二日	四月廿九日
八月三日	七月朔日
十月四日	九月三日
十二月五日	十一月四日

庚申	三伏日	玄猪
二月廿五日	初 五月廿七日	十月三日
閏三月廿六日	中 六月八日	十五日
五月廿七日	末 六月廿八日	廿七日
七月廿八日		
九月晦日		
十二月朔日		

八専	社日	彼岸	往亡
二月十七日	二月廿三日	二月廿五日	正月十九日
閏三月十八日	八月七日	八月六日	二月廿六日
五月十九日			閏三月四日
七月廿日			四月廿二日
九月廿二日			五月二日
十一月廿三日			六月十三日
			七月廿九日
			八月十日
			九月廿一日
			十月四日
			十一月十五日
			十二月廿四日

土旺
三月廿七日 今暁八ッ六分
六月二日 昼九ッ二分
九月七日 昼八ッ六分
十二月六日 夜五ッ二分

初午 二月十一日
八十八夜 閏三月十一日
二百十日 七月十五日
入梅 四月十八日
出梅 五月十九日
半夏 五月十三日
節分 正月十二日
節分 十二月廿四日

月食 四分半強
六月十五日翌暁九時七分 左ノ方ヨリカケ始メ八時六分左ト下ノ間ニ甚シク七時四分下ノ左ニ終

巳未年五月

張府

中野幸永謹撰

只領同社 嚴禁賣買

[illegible]

御免 肴あり五味薬 一ぷく四十八銅

う山

[illegible]

本家 う山[illegible]

本家 賣弘店
名古屋本町七丁目 [illegible]
[illegible]

請合 仕入

[illegible]椀 并 寺方[illegible]

[illegible]

請合[illegible]

尾州名古屋本町通九丁目

綿屋徳兵衛

日本一子

相傳妙薬

仙積散（せんしやくさん）

[illegible]六月二日[illegible]

本家

京都[illegible]

木月堂

[illegible]

出店

尾張名古屋本町二丁目雨[illegible]屋喜十郎

[illegible]

唐焼御艶白粉所

[illegible]

藤[illegible]

極上請合

請合 信[illegible]

詩歌
連誹

書画會

庚申五月十五日
於三州赤羽根
御坊 不論晴雨

三州本法院義譲上人学無所不窺為人謙遜好風流韻事不敢以才學衒於人獨業謙遜者流及其圓寂門人輩追慕不已欲擇日開書畫筵以慰其靈乞余言余乃書其由以付之　伊澤拙堂居士識

先師本法院講主學兼内外旁嗜文墨而客歳二月溘然逝矣吾徒之追懐何如也爰与衆相謀欲設一大書画會以報師恩之萬一乃卜以明年五月望日伏請四方君子臨期過集若寄賜高筆以助此擧幸甚

安政己未仲夏

門人　雲母社中某等謹白

補助　四方名家

幹事
柏堂　斗南　里僊
呉道　意空　星空

當日於盛會中席上展觀録呈上但御國所并姓名御記二月十五日限り御投與可被下候　以上

展観集所

京都東六条	丁子屋平兵衛
江戸両国魚店	扇面亭
大坂本寿町	文叢堂
奥州仙臺	高橋讃岐
肥前長崎	劉雲祥
豊後府内	讃岐屋太三郎
加州金澤堤町	松浦善助
越後三條一町	扇屋七右衛門
濃州大垣	衣杏溪
濃州笠松	山田屋嘉兵衛
尾州名古屋本町	永樂屋東四郎
尾州名古屋	秀島屋十兵衛
勢州津宿屋町	停雲舎伊十郎
信州飯田池町	文松堂喜八
遠州中泉	栄壽堂
三州吉田本町	宋文堂五平
三州岡崎連町	本屋文吉
三州西尾	閑益堂幸七

家秘清浄作精製
自園新茶
山本山

御茶師
東龍朝
山本製

自園
清浄
手製
御名茶

安政五戊午氣朔暦

不許賣買

正月小 朔戊寅
雨水 六日 明六時二分三
啓蟄 廿一日 今暁七時六分

二月大 朔丁未
春分 七日 明六時四分
清明 廿二日 朝四時二分

三月小 朔丁丑
穀雨 七日 夕七時七分
立夏 廿三日 明六時三分

四月小 朔丙午
小満 九日 夕七時六分
芒種 廿五日 朝四時三分

五月大 朔乙亥
夏至 十二日 今暁七時三分
小暑 廿七日 暮六時六分

六月小 朔乙巳
大暑 十三日 晝九時八分
立秋 廿九日 明六時七分

正月十五日月帯食 明六時一分左ノ方
下ヨリカケ始夕六時三分 二分余カケナカラ
入ル 此国ニテハ浅ク西国ニテハ深カルベシ

七月十六日月食五分 夜五時八分
上下左ノ間ヨリカケ始夕四時六分 上ノ
右ニ甚シク九時四分 右ノ上ニヲハル

七月小 朔甲戌
処暑 十五日 夜五時
白露 二日 朝五時五分

八月大 朔癸卯
秋分 十七日 夕七時六分
寒露 二日 夜四時七分

九月大 朔癸酉
霜降 十八日 今暁八時一分

十月小 朔癸卯
立冬 三日 今暁九時九分
小雪 十七日 夜四時四分

十一月大 朔壬申
大雪 三日 暮六時一分
冬至 十八日 朝四時七分

十二月大 朔壬寅
小寒 三日 今暁七時
大寒 十七日 夜五時九分

土用
三月四日 丑八時三分
六月十日 今暁九時六分
九月十五日 今暁八時九分
十二月十五日 朝五時二分

凡三百五十四日

丁巳五月
尾陽
石川氏蔵板

尾 平 陽

本町通西御坊前
本生掛
朱破掛
蠟燭卸所
梅屋平助

七味海男徳

本家大坂心斎橋筋
いろく有 右ニ無極上ニ物有
あづち町南西角
有馬屋久兵衛

本家
小笠原
家傳

美濃信濃境馬籠落合之間
十曲峠
壽仙

尾州新五郎

すけ打

近藤内膳様

家来当時浪人

太田六助

実年九才

水野出羽守様

家来　山田金平

実五十二才

討捕

おいらは嘉永七年にて六月廿六日誕生ゆゑ
すみよし町にておやのかたきうちのしだん
せがれ幸四郎トいふもの六助のちゝ天保
五年午ノ月六日にうたれてたちのき
ぬまづの宿中山田金平方へ十ヶ年
びぜんよりしゆぎやうに二十一ヶ年びぜん
より六助ちゝのかたきをたうちさく
ねんじゆらん去年四月ほど〳〵ゑもんぼさ所
きのせつなおかたきせい〳〵しきにまいるよし
きこえ〳〵当十九才親より江戸
だしてひにんとあおせ付おかれ
く所天なるようなる当廿六才のふ江
戸だしておあんすこし〳〵まで
付せききびよもちのあだうちし
くだんあらじそ世ざまねそる
べし

上

本國尾張　午王

名古屋延米相場休日定　商始六日

正月　七日　十一日　十五日　廿日　廿四日　廿九日
二月　五日　十五日　廿四日
三月　三日　八日　十五日　廿四日　廿九日　晦日
四月　五日　十六日　十七日　廿四日
五月　五日　十六日　十八日　廿四日　廿九日
六月　四日　十六日　廿四日　廿九日
七月　商八日限　十七日ヨリ始　廿四日
八月　朔日　五日　十五日　廿四日　廿九日
九月　五日　九日　十五日　廿四日　廿九日　晦日
十月　五日　十五日　廿日　廿四日
十一月　五日　十五日　廿四日　廿九日
十二月　五日　十五日　商廿三日限

御着城　御參駕　御上使
御茶壺　紀州様　長州様
薩州様　藝州様
右御通行當日臨時休

入梅　五月十三日

安政六己未年
歳德明之守惠方　寅卯之間

初午　二月五日　八十八夜　三月廿日

金　午未
神　申酉
土用　三月十五日　六月廿一日　九月廿六日　十二月十八日

社日　二月十七日　八月廿二日
彼岸　二月十四日　八月廿四日

土公　春竈　夏門　秋井　冬庭

黒六つき　寅　七日
白六つき　卯　八日

玄猪　十月三日

豊年　半夏生　六月二日
延米賣買繁昌

二百十日　八月五日

大將軍
八専　二月廿一日　四月廿二日　六月廿四日　八月廿五日　十月廿六日　十二月廿七日

歳上　正月廿二日　三月廿三日　五月廿四日　七月廿五日　九月廿七日　十一月廿八日

蝕　月そく皆蝕　正月十五日　月そく皆蝕　七月十五日

節分　正月朔日

天赦日　正月八日　三月七日　五月十五日　八月十一日　十月廿六日　十一月廿九日

小寒　十二月十四日　大寒　十二月廿九日

凡三百五十四日

冬至　十一月十六日

立春

尾陽米市場

米屋兵吉

節暦

月	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
朔	申	寅	未	丑	午	亥	巳	戌	卯	酉	寅	申
セツ	二日	二日	三日	四日	六日	六日	九日	十日	十二日	十四日	十四日	十四日
中	十七日	十七日	十九日	十九日	廿一日	廿二日	廿四日	廿六日	廿七日	廿九日	廿九日	廿九日

庚申　二月十九日　四月廿日　六月廿二日　八月廿三日　十月廿四日　十二月廿五日
甲子　二月廿三日　四月廿四日　六月廿六日　八月廿七日　十月廿八日　十二月廿九日
土之入　二月廿九日　五月朔日　七月二日　九月四日　十一月五日
十方くれ　正月十三日　三月十四日　五月十五日　七月十六日　九月十八日　十一月十九日

金毘羅大権現

日本一社の神にして此御山に
帝より御綸旨をも下し置
嘗て御由緒し能く古格御
役並寄進奉加人一切指
ふどく中ニ先守と出し我
ちうんも縮と金を挨拶進生
願ひ之拝小ありてけあね

本銀町四丁目
越後屋藤七郎
縞屋又兵衛

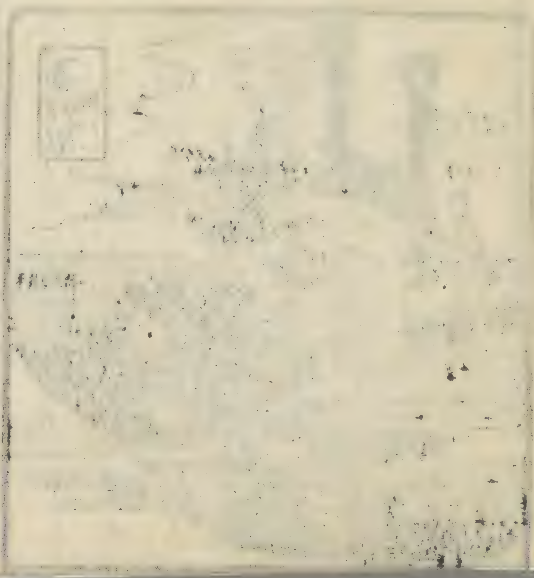
外神田
神田明神下
茂七

第五十八　大吉

いふでにおよぶ人はよそかたならぬをとゞるのあるんをつけらうかへとるもなるべし
まち人きたる
ゑらんぶんうけおい一方よろし
はそどいてあふ人はまことのこちてうるいとれもちうはよろこびあせよし女に多んのうさびぐちろけあへ
うちろいとめてまをあう一方よろし

第五十三　吉

いさうでゞあふ人はさうちの利ひすゑ大みくのまをまつべし
ゆうくの人ゝそうだんしてよしまちへきるる
たびだちかけ出いよ



金毘羅大権現

日本一社の神にして此御山にうつりて他に奥の院別当ありてあまた国々に其信者
帝より御綸旨をも下し玉ふ所なり且他方より御勅額御寄附なりしも
曾て御由来しるく吉輔御山法に関て御宝殿より諸国へ開帳ありし事
なく又寄進奉加入一切請申さぬ所也然るに御由緒を記事を奥の院
にて守札守出しいつわりし神符開帳いたし諸人に迷ひをいたし
なんと偽と金を捨進奉あまたあるとの事につき御高札の表に記を
頼ひ不申様にあるもありてわかわく諸人に志らしめんがため如件

年玉 本國尾張 上

名古屋延米相場 休日定 商始六日

月	休日
正月	七日 十一日 十五日 廿日 廿四日 廿九日
二月	五日 十五日 廿四日
三月	三日 八日 十五日 廿四日 廿九日 晦日
四月	五日 十六日 十七日 廿四日
五月	五日 十日 十六日 十八日 廿四日 廿九日
六月	四日 十六日 廿四日 廿九日
七月	廿四日 商八日限 十七日ヨリ始
八月	朔日 五日 十五日 廿四日 廿九日
九月	五日 九日 十五日 廿四日 廿九日 晦日
十月	五日 十五日 廿日 廿四日
十一月	五日 十五日 廿四日 廿九日
十二月	五日 十五日 商廿三日限

御着城 御発駕 御上使 御茶壺 紀州様 長州様 薩州様 藝州様 右御通行當日臨時休

入梅 五月十三日

安政六己未年 歳徳明之方 寅卯之間

初午 二月五日 八十八夜 三月廿日

金神 午未 申酉

土用 三月十五日 六月廿二日 九月廿六日 十二月廿六日

社日 二月十七日 八月二十日

彼岸 二月十四日 八月廿四日

土公 春竈 夏門 秋井 冬庭

黒六つき 寅 七ツ 神

白六つき 卯 八ツ

亥猪 十月三日

節暦

	正	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
朔	申	寅	未	丑	午	亥	巳	戌	卯	酉	寅	申
セツ	十二日	十二日	十三日	十四日	十六日	十六日	十八日	十九日	十九日	十九日	十九日	十九日
中	廿七日	廿七日	廿九日	廿九日	廿九日	廿九日	十二日	十四日	十四日	十四日	十四日	十四日

豊年 延米売買繁昌

半夏生 六月二日

二百十日 八月五日

天上 正月廿二日 三月廿三日 五月廿四日 七月廿五日 九月廿七日 十一月廿八日

八専 二月十一日 四月十二日 六月十四日 八月十五日 十月十六日 十二月十七日

蝕 月そく皆蝕 正月十五日 月そく皆蝕 七月十五日

冬至 十一月廿日

節分 正月朔日

天赦日 正月七日 三月八日 五月十五日 八月十一日 十月廿八日 十二月廿九日

小寒 十二月十四日 大寒 十二月廿九日

凡三百五十四日

庚申	甲子	土之入	十方くれ
二月十九日	二月十三日	二月廿九日	正月十三日
四月二十日	四月十四日	五月朔日	三月十四日
六月廿二日	六月十六日	七月二日	五月十五日
八月廿三日	八月十七日	九月四日	七月十六日
十月廿四日	十月十八日	十一月五日	九月十八日
十二月廿五日	十二月十九日		十一月十九日

尾陽米市場 米屋兵吉

第五十三 吉

いさゝかあやまちの祈は すこしも天のとがめをまつべし ○あらくの人にそしられてもじまち くまる ○たびだちおかけよし

第九十五 吉

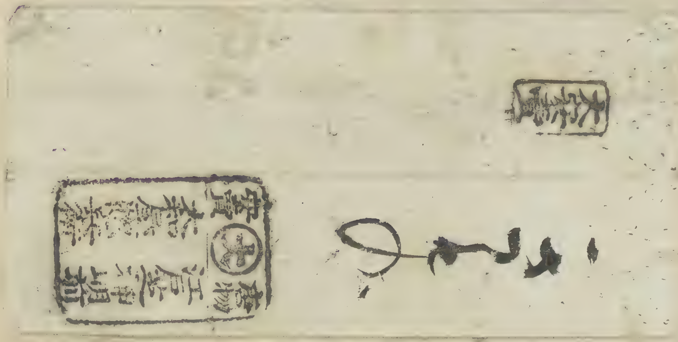
いろいろのあるかよそにたからを とるをあらんとつけらるが へ ともなず ○まちへきてくる ○あんざうけおは一ばかよし

第八十五 大吉

はそてあふみはまことのこちて うるいとこれよりはしあはせ よし女にあのさゝびちち うけたいうろいとあて はあり 一ばかよし

外神 神明 戌七 神明 廿七

本所町四丁目 越後屋平右衛門 縞屋文兵衛



御膳濱納豆

萬壽扇

御扇子司
皇都

天菅拜賛

赫焉絶天安
神徳対紅日
天下一枝梅
扶桑文道祖

明治二年己巳
中外通暦
東京開成所

○浪花天保山沖ニ
拂郎察國
蛟龍舩
之圖
長サ
五十五間
横三十二間
以上五艘
乗組七百人宛

誠は人の道也

日
天父母地
月

曰く日々に出る金は入ると存
かなひ中よく家業大切

あいくるしへ人ハよく参じつねに
あゝろよふ来く川ハ無事す
家内中よければ化福あり
なをよけれバいつも極楽

羅服毛唐筆藥綿
紗達氈紙墨瓶香

大坂唐物町中橋筋南へ入
唐紅毛反物類
唐物店
青焼物[illegible]類
(金)一 播磨屋[illegible]

京都新織切地類 品々
羅紗呉呂服連 類品
東都 萬叢物所
金物類色々
唐革唐更紗 類品
東都 [illegible] 右御蔵前町二丁目
美濃屋理兵衛 仕入

本町十二丁目[illegible]

流行悪性暴瀉病手当心得之事

これらとふやまひ俗にいふころり てあてこころえ

此病の療法さま〲数あれども急速に起る故に醫師を招く間
も手当の仕方あしければ忽ち必死に陥ることあり文政
年中流行せし時も外国まてハ数年止まざりし前例に據れバ
今年も亦去年の遺孽あらんことを慮りて西洋の傳法と
吾師の経験を抄録して世に弘む○鑒法 手足譲のごとく冷え
無力の皮肉弛緩脈甚遅きハ此病の確候也 終に黙しく
痛れを吐下し腹痛劇く筋肉拘急しく伸びん苦悶て遠
に萎衰甚て其の方らびに簡便にて切実なる手当の方を
左の如し○豫防 大酒大食日中午睡易饐魚肉菓実
等を禁ずべし。羅紗衣を着るべし。又ハ木綿にても腹を巻き夜
分寝冷を防ぐべし○看護 此病に侵されりと思ハバ
糯湯れ煎茶に益菜に焼酒を入まぜて度々呑べし。脚湯とく湯にて
膝下より足まであたため足ハ芥子泥を貼り温覆て汗を発すべし。
このうちめてる焼酒に布片をひたしてき手足并に心下を摩擦る
べし此みの手当にて刺絡。灌腸方。薑湯菜。滴水浴おなじ
是らは医者に任すべし○左に毒なき藥方をあつれ
常に心くはへおきてよし

芳香散 桂枝 益智 干姜 三味等分粉にして三匁ほど用ゆべし

肉豆蔻酒 肉豆蔻五匁粉にしてつよき焼酒壱合にひたし
藥気よく出て後。四五十滴づつ水にて用

芥子泥 芥子の粉に温飩粉をまぜ酢にて練り紙にのべて貼る

止渇飲料 大麦の挽割。又ハ粳米の煎汁に焼酒を加へ用

安政六年己未七月 柳河氏塾生ホ謹誌

上梓 刷施

相ぬきゝ傳

此業條ハいぼほくろ
なりとおもなにてもとるる
うすめなりまの方ハたま
せたさたヲ一寸目の二寸目
入まく出来八しておうさい
人のこりて物もを取りよ
かてあとけのもので文字ヲ
おけバめけるる傳念場

花ほし飴

京 都
柳馬場蛸薬師下ル町
御昆布所
伊勢屋甚助

甲府八日町
御菓子司
升屋太郎右衛門

御香油
梅花
すきんかう
尾州名護屋本町六丁目
鏡屋正七製

信州 松本
太
三輪素麪所
城南新町
中村屋製

越中富山
人参五香湯
八尾林又右衛門

大坂尾町八百屋町角
御用
茶園 粟餅
春景堂製

社頭祝
みよしのやかし乃宮の山くちに神よつかふるなと　師兼

社頭述懐
社こそ我頼みあひなくし

社頭祝君
今よりも我らか人よきの風と八祈るらし行川あるらん　為藤

社頭祝世
社ある□て君か万歳と祈るらし
三笠山松の村立ひ乃としさして祈るるる君か千年　同

社頭祝
以上
治れる世を祝ひて
宮柱まさしくそ君か代ハうこかぬ天の下ハいさ　道円院

神風やいとくの治乃いその世やとこ世の浪のあまた也　ま　皇太后宮大夫俊成

社頭祝言
寄社頭祝
これも祝とかくし三字題に字数の足りとこし
うれしくも仏の為と君か代とまつる日吉ハあまてくりる　為藤

社頭新
いかり山さのふ乃かくれの夕つくひさして世の祈を知れ　後福光院
此歌ハ社頭のんとうたへハ新ハなるまとといひても祈けし

伊勢
世を照し光ハ同し日吉そいふかりとも新そさや紀　為家

大神宮
文よしと照と乃むかし昔いや神路乃山の明けのくも　為藤
以上
伊勢とりふもあまりしんなかるへし
神代より同しく為や立つ乃んともせそ川の春乃嗟　同

石清水
八幡
宇佐
賀茂
松尾
平野
稲荷
春日
鹿島
大原野
布留
住吉
日吉

石清水
なかそて守られゆくへ石清水君か千年そ汲て知らく　宗雅
石清水なかれなかれて乃のち世のあけハ神の頼よ　為藤

八幡
うきの世や我立杣のひしてとものくくし社の末も頼き　同

宇佐
神もとよかものかたりそつらいあやうかへを　太政大臣
まつりますて御代ま乃あはれ宮やと祈るらんかのおのこと知れん　耕の

賀茂
しとも祈民のかへ乃網さま乃社とも乃我君の為　後京極院
いなりの山その二月乃初午まの乃て神八人とらし　為藤
早まりれくまかまても社まなと大ましと立の山の峯　前大納言公
稲荷のことやとくし出るまかりまき　為の　政大臣

春日
大原や神の久かさ尖なそとは山まあるまうへ知るきまを　耕の
この丸ともへ二まらく家世まふるの神松かな　同

鹿島
かてねまかさやせき一まく活かたさらて住吉の神　為藤
君か代あかし浦乃神さなや人の式ひく二の渡　同

ゑはおびたゞしようへかみのうへとめよし
かべうはしらくらうてき あるしり
ござうよりせんこうつそ火をつけるよう

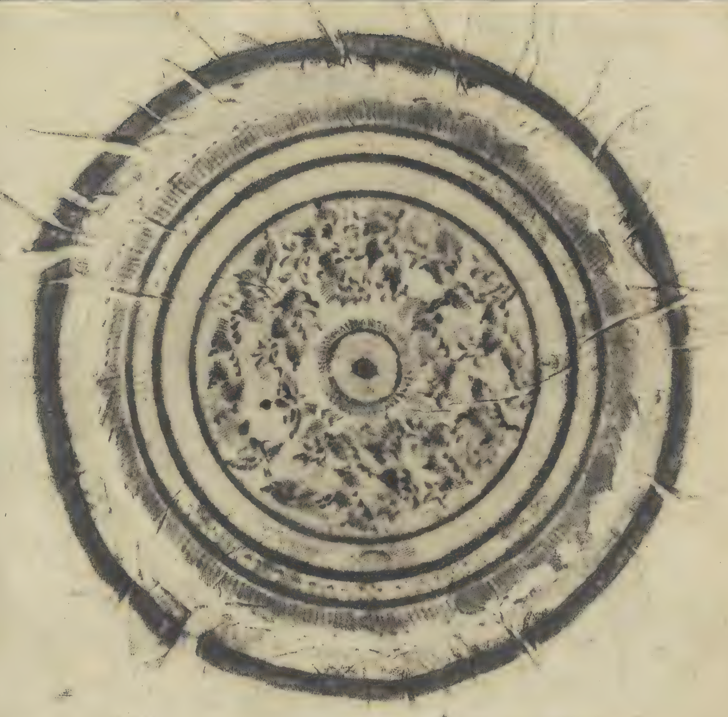
おらんだ
新美繪花火
ゑんくわうゑはなび
座敷なぐさみ

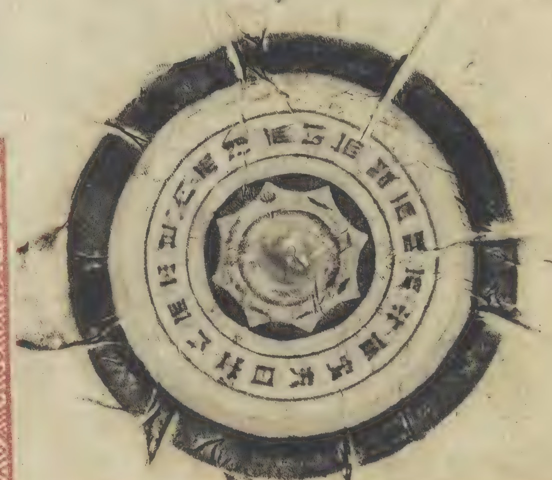
御菓子

御目見得物ふくら
さとうつけ麪
京御菓子所
信州飯田松川端
松月庵和菓子屋庄三郎

御用
製所
飯田御城端
松月庵

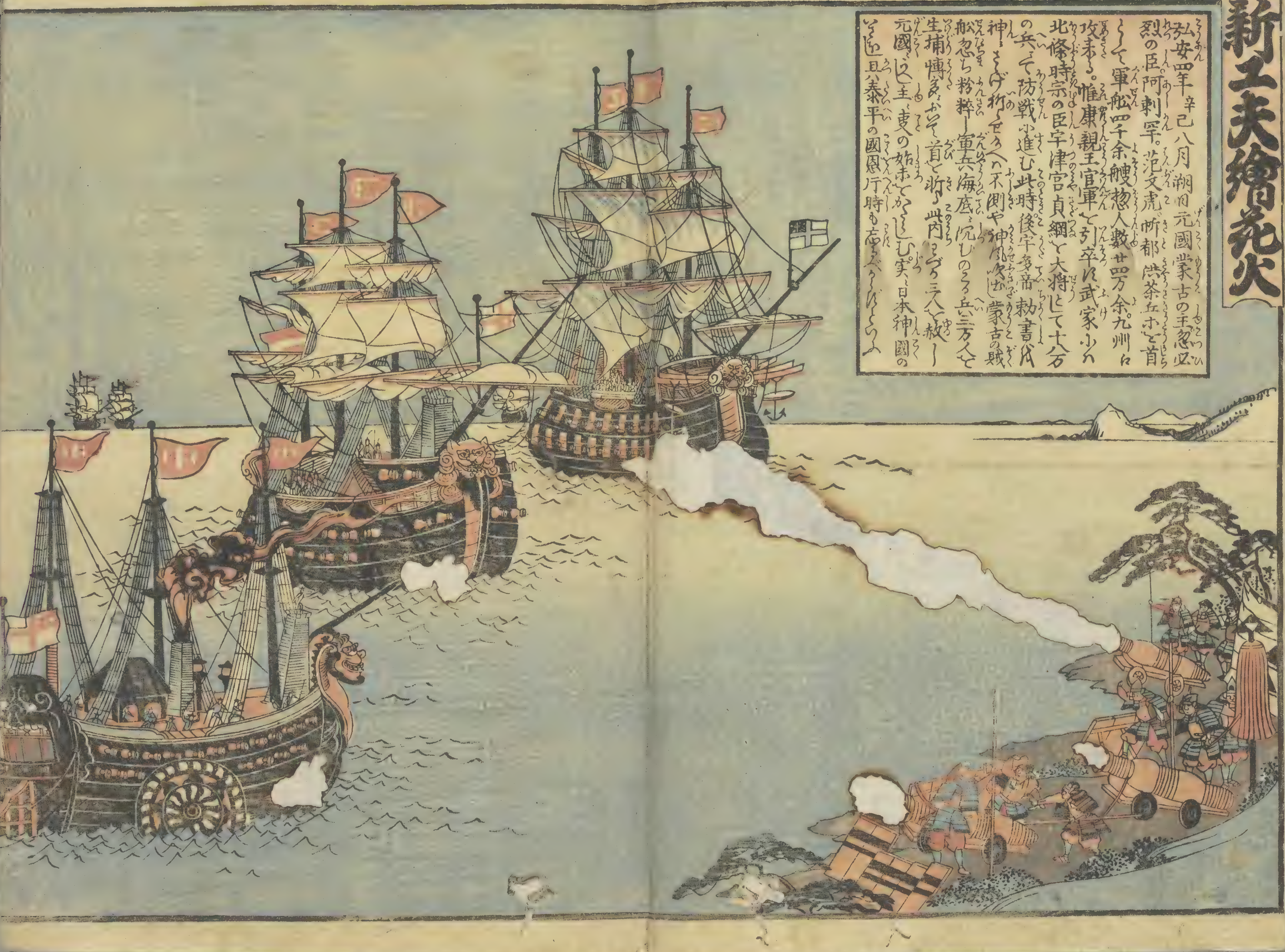
御菓子





新工夫繪花火

弘安四年辛巳八月朔日元國蒙古の主忽必烈の臣阿剌罕。范文虎。忻都。洪茶丘ホと首として軍船四千余艘惣人數廿四万余。九州に攻来る。惟康親王官軍を引卒れ武家ハ北條時宗の臣宇津宮貞綱を大将として十万の兵にて防戦に進む此時後宇多帝勅書代神に祈らせ給へバ不測や神風吹出し蒙古の賊船忽ち粉粋し軍兵海底に沈むのこる兵三万人を生捕博多にて首を斬る此内わづか三人を赦し元國に返し主へ事の始末をかたらしむ実に日本神國の威光且ハ泰平の國恩片時も忘るべからざるの



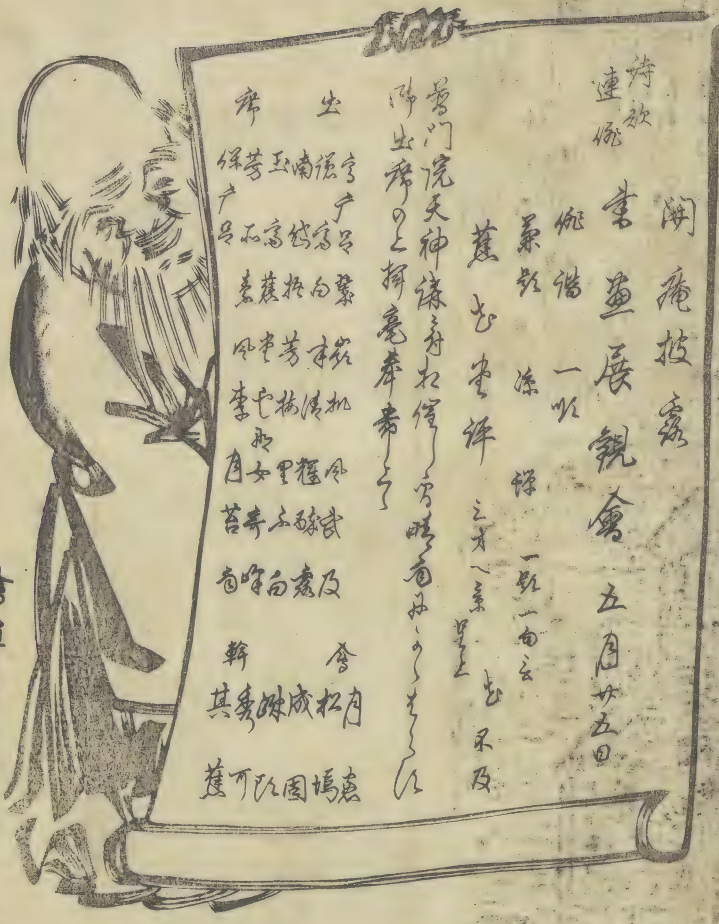
調布

御用
大宮通元誓願寺角
御菓子所
[illegible]若挾製

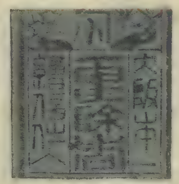
御詠
玉川調布
[illegible]

森平板

尾 大 州
[illegible]



開庵披露
書画展観会
五月廿五日
詩歌
連俳



御免

和漢蘭無雙
内臓之補薬

三國錠

効能　一包　百銅
　　　一箇　銀壹朱

抑此薬ハ元来脾胃を強し気血を順らし内真の虚ハ補ひ腹中に精力を増す所の妙薬なり故に此二臓の虚労より起る諸病に此薬ハ常に用ゆれバ年月を経ざる難病とても治せずといふ事なし是其諸病の根元を齊るゆゑに一身健固に成て自ら長寿をたもつ古今稀代の霊薬なり就中病ハ一切留飲に奇効あり其外の効能ハあらましハ左に記す

気欝	逆上	眩暈	頭痛
腹痛	積聚	疝痛	吃逆
悪心	呃吐	不食	乾呃
攣急	腹脹	痞鞕	霍乱
中暑	泄瀉	痢病	吐血
下血	崩漏	滞食	宿酒
輿旋	船暈	五痔	驚風

此薬右の諸症に軽きハ半片重きハ一片を茶又ハ白湯にて用ゆれハ神妙に即効あり万の食物他薬一切何もきらひ是なし

御免調合所

取次所

濃州席田郡佛生寺邨

信樂堂謹製

御免取次所名古屋分

傳馬町六丁目	綿屋與三兵衛
日置東蛭子町	志水屋又兵衛
門前町	石臼屋仁兵衛
下茶屋町	京萬屋新藏
石町	吉川屋七左ヱ門
巾下押切一丁目	金澤屋喜兵衛
永安寺町	杉村屋儀助
宮神戸町	鯛屋與右ヱ門
傳馬町十一丁目	中野屋新藏

右之外三郡國々在町々有之候

[illegible]

神仙一角丸

廣小路大津町西
種痘所
引請
業名町
中野隆輔

江戸山下御門通南鍋町
清きよ羅の油

常磐香
宇野九甚五郎

中村門
中村屋佐兵衛

御一角丸 一粒八文

[illegible]

子ありうく

ちゝおやのうまれあふさを
ねてもさめてもわすれまじ
まづあさおきてみをきよめ
もものたちをおうみけり
おやのおんをそむきなく
てならひよくしりさだめて
そのみもふかくつゝしみ
いゑのつとめをおこたれ
ゆめにもおやのことをわすれ
あはれとおもひやまあればれ
何ごともおや[illegible]をはたさず
とりし何かにつけとむ
よのよし何事もよくして
ともときへつゝめゆしあわれ
天のこゝろにかなひはて
あそんむにゆくとこれを
おさなきこゝろにまもりなく
おひとりたをしたちよ

不二孝

たばこ
現金 ひしや理八
松ノ町長者町角
お安く なかほど南がわ

御蔵王
油煙墨
南伝馬町
古川屋万右衛門

風薬 一代三…

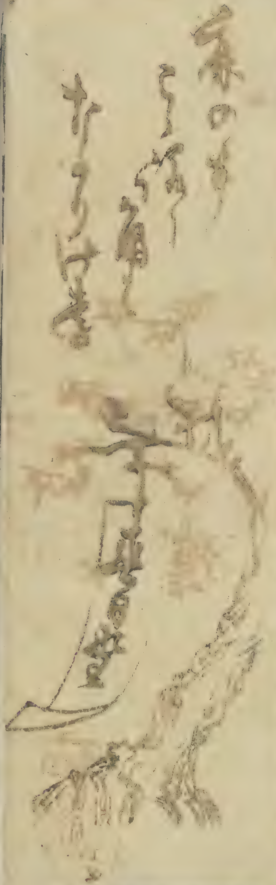
金毘羅社御鬮

第一大吉　飯田智光院

七寶浮圖塔（シツホウフトトウ）
高峯頂上立（カウホウテウセウニタツ）
衆人皆仰望（シユニンミナキヨウホウス）
莫作等閑看（ナカレナスコトウカンノカンヲ）

金銀をちりばめたるたふなり 人あふぎていある人之
たかき山のうへに立たるハなを たふとく見ゆるごとく
志ゆ人あふぎみるそこて たふとみあり
此人ハあをさきりニハまうれまいて大 人あるハいよく大吉也

望事かなふよし 待人来るべし おそし 売買よろし 十分叶ふ 世話あり 口舌あり 争ひハろうにせハあやうし 旅立ちよし 婚しよし 病ハをひけんあくすべし 失物出づ



安政六己未略暦

大	歳徳 金神	小
正 朔 せ廿二日 中十七日	天	二 朔 せ廿二日 中十七日
三 朔 せ廿三日 中十九日	天一天上	四 朔 せ廿四日 中十九日
六 朔 せ廿九日 中廿四日	八せん	五 朔 せ廿六日 中廿二日
九 朔 せ廿四日 中廿九日	十方くれ	七 朔 せ廿十日 中廿六日
十一 朔 せ廿四日 中廿九日	さのへね	八 朔 せ廿二日 中廿七日
十二 朔 せ廿四日 中廿九日	かうあん	十 朔 せ廿四日 中廿九日

ひがん 二月十四日 八月廿四日　社日 二月十七日 九月二日　つゆ 五月十三日　はんげしやう 六月三日　二百十日 八月五日　どよう 三月十五日 六月廿一日 九月廿六日 十二月廿六日

八十八や 三月卅日

月そく皆既 正月十五日 夜五時八分

三伏日 初伏 六月十一日 中伏 六月廿一日 末伏 七月十一日

大經師内匠

弘所 尾張名古屋 書林

開 三 屋 大でんま町三丁目 ゑのぐ 本家 田中

歳手 御年玉

日用重寶 年數早見

本街三丁目 丸屋甚兵衛

子	庚[illegible]	壬十七	甲寛永	丙十三	戊慶安	庚三	壬十二	甲貞享	丙九	戊五	庚五	壬十七	甲延享	丙六	戊五	庚九	壬四	甲文化	丙十三	戊十一	庚十一	壬五		
丑	[illegible]六	癸十八	乙二	丁十四	己二	辛寛文	癸延宝	二	丁十	己六	辛六	癸十八	乙二	丁七	己六	辛天明	癸五	乙二	丁十四	己十二	辛十二	癸六		
寅	壬七	甲十九	丙三	戊十五	庚三	壬二	甲二	丙三	戊十一	庚七	壬七	甲十九	丙三	戊八	庚七	壬二	甲六	丙三	戊文政	庚天保	壬十三	甲安政		
卯	癸八	乙元和	丁四	己十六	辛四	癸三	乙三	丁四	己十二	辛正徳	癸八	乙二十	丁四	己九	辛八	癸三	乙七	丁四	己二	辛二	癸十四	乙二		
辰	甲九	丙二	戊五	庚十七	壬承應	甲四	丙四	戊元禄	庚十三	壬二	甲九	丙元文	戊寛延	庚十	壬安永	甲四	丙八	戊五	庚三	壬三	甲弘化			
巳	乙十	丁三	己六	辛十八	癸二	乙五	丁五	己二	辛十四	癸三	乙十	丁二	己二	辛十一	癸二	乙五	丁九	己六	辛四	癸四	乙二			
午	丙十一	戊四	庚七	壬十九	甲三	丙六	戊六	庚三	壬十五	甲四	丙十一	戊三	庚三	壬十二	甲三	丙六	戊十	庚七	壬五	甲五	丙三			
未	丁十二	己五	辛八	癸二十	乙明暦	丁七	己七	辛四	癸十六	乙五	丁十二	己四	辛宝暦	癸十三	乙四	丁七	己十一	辛八	癸六	乙六	丁四			
申	戊十三	庚六	壬九	甲正保	丙二	戊八	庚八	壬五	甲宝永	丙享保	戊十三	庚五	壬二	甲明和	丙五	戊八	庚十二	壬九	甲七	丙七	戊嘉永			
酉	己十四	辛七	癸十	乙二	丁三	己九	辛天和	癸六	乙二	丁二	己十四	辛寛保	癸三	乙二	丁六	己寛政	辛享和	癸十	乙八	丁八	己二			
戌	庚十五	壬八	甲十一	丙三	戊万治	庚十	壬二	甲七	丙三	戊三	庚十五	壬二	甲四	丙三	戊七	庚二	壬二	甲十一	丙九	戊九	庚三			
亥	辛十六	癸九	乙十二	丁四	己二	辛十一	癸三	乙八	丁四	己四	辛十六	癸三	乙五	丁四	己八	辛三	癸三	乙十二	丁十	己十	辛四			

嘉永四年辛亥初夏新雕

川本幸民譯

氣海觀瀾廣義

靜修堂藏

風流

瀬戸物類
猪口盃類

御誂御好次第
焼附仕候

大安賣

猪口盃
陶器類
於呂志

東都今川橋西側

吾妻屋喜三郎

人参三臓圓

此御薬五妙三連の要訣にて功能顕著は
主治甚だ数多なれば左にしるす余は用ひて
知るべし 猶功能の委しきは能書に出しぬ

○夫此薬の功能ハ一々述るに遑あらず第一心脾腎の三臓を補ふ事を専らとす 補ひ諸病
ありとも治せざるハなし凡心脾腎の三臓ハよく安じて治す是諸虚諸病の源ハ皆
此三臓の労減より発り其病大かた気を労し或ハ大酒飲食節なく又色欲の
過度より三臓虚損し元気かわくぶらくと故に平生気力なく五臓六腑
とも減耗し皮肉虚弱になり病多くと諸病を発し遂に百病をまねく動なれば
是等の諸症に用ひて至妙なりよく気血をめぐらし大に腎精をまし皮肉および
五臓六腑をかくし諸虚百損の諸症を治して一生無病壮健ならしむ

○心の臓虚すれば気うれ乳下に動気あり胸痛むことの腕のかより
汗出てときゝ怔忡し物にもおどろきやすく何ごともわすれがちなり
健忘中風身の痛なども治す

○脾の臓虚すれば食すゝまず少のものも中りさうなく又ハよく食すれども
とかく痰多く遺精夢遺盗汗口中かわく唇ただるゝ等の諸症おこるなり
瘦せ気血よわく其後ならず疲かるく或ハ不食すてゝ又ハ疲れて咳なく痰の
はく痰積喘咳久しく止ず虚労労咳顔色黄ばみ夜中咳なく

○又ハ三ヶ月もうち遠く下血痔脱肛遺尿身体冷るなどの諸症におよぶなり
腎の臓虚すれば陽道の勢ひよハく顔色わるく肌膚瘦せ陰虚火動も
うち足のうら熱ありて腰痛ひへいたる肝気たかぶり激熱ありて手足より気血よく
小便かよく又ハ白く小便の痛気すみ白気みだりく歯いたむ耳なり目かすみ血
ある髪髭白く或脱し婦人ハ帯下血のみち月水調ハざる等の諸症おこるなり
右何れも心脾腎の不足よりおこる病ゆゑ是等の症此薬用ひて其病の根本なる三臓を
よく調ふるよりよく諸病自ら治し尤大病後用ひて気血忽ち調へ身体するどに勢
力を生じ旭の昇るがごとく肥立ことすみやかなるべし虚症の人又ハ中年以後の男女たりとも用ひば
よく気血をめぐらし食をすゝめ大に腎水を壮にし陰陽ともにさかんにし暑寒をふせぎ積聚を退け
脾胃を厚くし筋骨をかたくし耳をよくし目を明にし風をのぞき冷をさり手足を
かろく身軽く爽にし肌をうるほし精をまし面色をうるはしく寿命をのぶる大妙薬なり

御煉薬價

一剤入 正銀八匁

半剤入 同四匁 (但し半剤と一包ハ十日分なるべし)

小半剤入 同貳匁

御免調合所 大阪薩摩堀東之町 元祖法橋吉神護運

賣弘所 名古屋巾下 美濃屋勘六

取次所諸國ニ多し 然れ共近年世間同名の類薬甚多く出たれバ 名所をよくく吟味の上御求メ下されべく候

無類 八 別改

御羽二重綿

飯田知久町
南
山村屋仕入

日本橋通町一丁目
白木屋彦兵衛

今般御奉公人男女乳母口入仕候ニ付御引受
申候上御用之節ハ御沙汰被下候様奉希上候以上

男 女
乳母 奉公人口入所
鍋島町弐丁目村田屋出張
村屋鐵次郎

和漢墨筆硯所
忍のゑ紙
諸職刷毛類
香具唐線香

おろし 小うり

唐紙 伯紙 色紙
短冊 折手本

朱肉 青肉 黒肉
蠟石 朱 朱墨

舶来文房類

右之品追々御用相違ニ来り候ニ付日増ニ繁栄仕難有仕合奉存候ニ付更ニ元方吟味仕直段格別下直ニ差上申候間不相替御用仰付被下候様奉願上候

精花堂

名古屋傳馬町六丁目
京國屋庄兵衛

亀の市

御菓子
名古屋駿河町東南町
三河屋茂兵衛

揮雲堂

現金かけねなし

御筆墨数品　和漢名硯　蠟石印財

唐筆唐墨　唐紙白帋　朱肉青黒肉

折手本経冊　繪具香包　文房諸具

古名跡法帖類并ニ画帖御好次第仕立所

名古屋本町四丁目

津國屋三右衛門

現金

……六

本家

尾州名古屋本町通十丁目西側中程

御線香所

旭香堂

加藤茂兵衛製

本直酒
備後鞆
保命酒屋
中村吉兵衛

養氣酒
備後鞆
保命酒屋
中村吉兵衛

御薬酒
備後鞆住
十六味地黄保命酒
保命酒屋
中村吉兵衛

現金 正札
命[illegible]物類
尾州名古屋 [illegible]
[illegible]

[illegible]

遠州[illegible]
[illegible]

東海道岡崎驛
御菓子所
上傳馬 布袋屋製

銘酒 正宗
浄酒之義只今迄小賣ニ仕[illegible]
小賣相始申候ニ付浄酒樽詰[illegible]上製
賣出し[illegible]
御年始御用[illegible]
[illegible]
現金 [illegible]
午
十二月
[illegible] 松田屋[illegible]
[illegible]

麦らくがん

飯田傳馬町
御用 御菓子所
大丸屋平助

小倉野

此開諸傘數品

からかさつるひゆう

一 をばか御入用之日より十日程

よ丶御申し又三月さ[illegible]

迄で御入[illegible]

[illegible]日より日[illegible]

あまれはよくこ[illegible]

[illegible]

名古屋[illegible]町

中むら[illegible]

越後高田
御用 御菓子司
横町 小川製

翁餅

御誂一枚跋

金 國一

紙類一枚跋

上 仕入

上 [illegible]
[illegible] 四丁目

尾州 二

清浄巻掛 本生蠟燭 土用請合

名古屋大[illegible]町 泉屋[illegible]兵衛

御用 御婦志紙司

名古屋本町六丁目

かゞみや正七製

御膳[illegible]

[illegible] 龍[illegible][illegible]

[illegible]

三月望

薬品會 修養堂

仕 大 入

御元結所

尾州名古屋伝馬町六丁目

紙屋惣右衛門

[illegible]

漢蘭丸

尾府藥舗[illegible]生田光三製

作陽

名產

御[illegible]墨

津山新魚町

藥屋壽富製

霊方萬金丹

一諸病[illegible]

一[illegible]

一[illegible]

一毒虫[illegible]

一[illegible]

右此藥者七日齋戒沐浴而禱

天地端午日修合之

越中富山　松井源右エ門

盈々甘露

穆々清風

仙竈佳煉

室供王公

信飯田新町

游泉軒製

越州府中

雲丹

小川利吾

尾州名古屋門前町

御元結所

別

中村屋[illegible]

うはを袖に入まゐらせて
かくよくさして餅なし
餅ちよつとして湯に入
ゆでたらくを供よろしく
めし候

翁へ大蔵卿へ進上

信州仁科大町

御用寒製所　福島孫三郎製

白玉餅

團圓滑白存餘潤
淡味幽香品自殊
不只養生能解渴
奇珍恰似水晶珠

廣昌號

本店專办揀選正地道藿香汀沙線草極紅菓皮廣膠各
項上貨藥材發客貨眞價實童叟無欺近有射利之家將
海南香與雜魚目混珠常有害人多矣是以本店存心居
世挑已受人無委件徃河南寶崗駁佳獨揀買此地道藿
香所札之繩細少并類無一混乱與別家不同請為細訂
如有假貨男盜女娼　貴客賜顧請認招牌為記庶不致
有悞本店在粵東省城太平門最公街坐南向北開張

志なの梅

飯田御堀端
和泉屋庄三郎

御團扇

京都四條御旅町 御團扇所 大坂屋平治郎

随用 御飯[illegible]の法

一 夫五穀は天地の正物人の性命[illegible]上[illegible]
[illegible]

一 茶[illegible]

一 水三べんかへ[illegible]六七合[illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 [illegible]

一 一日[illegible]

[illegible]一日[illegible]

施印

別誂

鹿北所蔵

入篠巻

口上

一私店仕入綿之義ハ尾張三河之上
之綿ニ而仕立方相撰之尤白系
当国方々へ入篠巻[illegible]仕立方[illegible]
之上誂物御好次第御用向[illegible]
[illegible]皆様上下以上

信州飯田知久町
山村屋八[illegible]

本生 吉 請合

大蔵小蠟佛前蠟品々

清浄蠟燭所

備州飯田池田町

西尾屋和兵衛

巳五月廿九日

酒々井

藤田屋

阿州

御免御國産藍仕出所

麻植郡

川島町

若松屋

亮助

大阪西横堀

絵具仕入

吟 本香

万

極上 イ 請合

飯田傳馬町

本場紬巻

清水屋平助

秀

甲州勝沼宿
蒲萄香
小沢小右衛門

花
六月　日會
改半札
尾州國府宮
神禮賦與會所
屋伊勢町六丁目
院境内

白
船
上
極製上
御湯の花
本元
柳屋

鳥
六月十日會
改半札
尾州國府宮
神禮賦與會所
伊勢町六丁目
院境内

名
平塚折町
七味とうがらし
物

御染物所

太[illegible]家

御焼麩所

羽州庄内雀ケ岡

五日町大嶋屋専松

おんぎん 寺町通四条下ル[illegible]前

御[illegible]所

正札附 河原田太三郎店

[illegible]

砂糖所

京四条通[illegible]西へ入町

広瀬[illegible]太郎

甲府 八日町[illegible]

松屋[illegible]右エ門

全等糖

上請 澄合

水油三八五諸

常州真壁

谷口氏製

唐衣筆

三河国和歌
大通揚八幡山

請合
冨田
越前福岡西町
冨田屋庄兵衛製

大極上
七年製

御用

御かうやく

御用
御地
織
御蝋燭所

呉服るゐ品々
古物類
小倉 常地
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]道具類
[illegible]
[illegible]
[illegible]

御伽羅之油煉所

元ゆひ品々
[illegible]
梅花香油
白粉紅

[illegible]
扇子
[illegible]
小間物類品々

五

正札附

松本通中町二丁目

[illegible]

御艶白粉司　京数屋町通松原下ル　田中賀屋製

京

御膳
山葵漬
豆州
湯ヶ嶋

京都
御神骨接所
三条通寺町東入
津田屋吉兵衛

京姉小路寺町西へ入
御用御香具所

不老
長生
加多久利糖

大人奇方 天元養氣圓

此薬用ひやうハ志まろふけづりさゆかし
ひくとくさを粒を三度斗ゝ用ひてよし
むすきさんふ不用ひく又志だふく
食后半とまろべし
又此薬よく病ハあるとえハかし
むゆるらくゐべつさなとゞあるべし
いたく薬の志るしたゞしきと
ふびべし志たふくしてひよく
病さるべし

甲斐名産 尼流雲

濟世救民方
大人肝一切の奇薬
天元養氣圓
修製所 勢州三重郡小古曽庄 河村古僊

甲府 柳町三丁目 玉壽堂 品々 山田小金助

日蓮上人御所持 蛭石

御菓子所

此お六さん櫛ハ累年他國へ賣弘まり候ニ付あちこち人のよく知り所ニ御座候ニ付近年種々の品多く流布しく紛らはしき品も有之候ニ付此度其筋へ申上ゲ遠けからず純心を以て当店方様乃御好みの通り製作仕候 木形ハ勿論座方ニ差上候入仕出し仕立追て評判宜しく御座候 [illegible] 御求め [illegible] 雑賀社會 [illegible] 當り上とも世上へ廣く賣弘め申候 [illegible] 御櫛根本とも付ケ賣出し候白紙ニ朱印とくと御吟味之上御求め被下候様偏ニ奉希上候以上

弘化三
午正月

木曽藪原宿
北野屋文吉

本家お六櫛

大阪 大 目印

鴻の内浪花橋八幡筋北へ入

墨筆硯道具細工所

筆小道具類

中嶋屋卯之助

京建仁寺町四条下ル三丁目

ゆめぐすり所

下 一所製薬湯所

切 名

千蒲萄

[illegible]

小澤小右衛門

本家調合所

保児丸

濃州土岐郡神箆

伊藤氏製

奇應丸三十粒

[illegible]
木曽福島
[illegible]屋忠兵衛

仕入
大極上[illegible]
[illegible]本[illegible]
請合

大極上[illegible]

本家 杉澤製

[illegible]

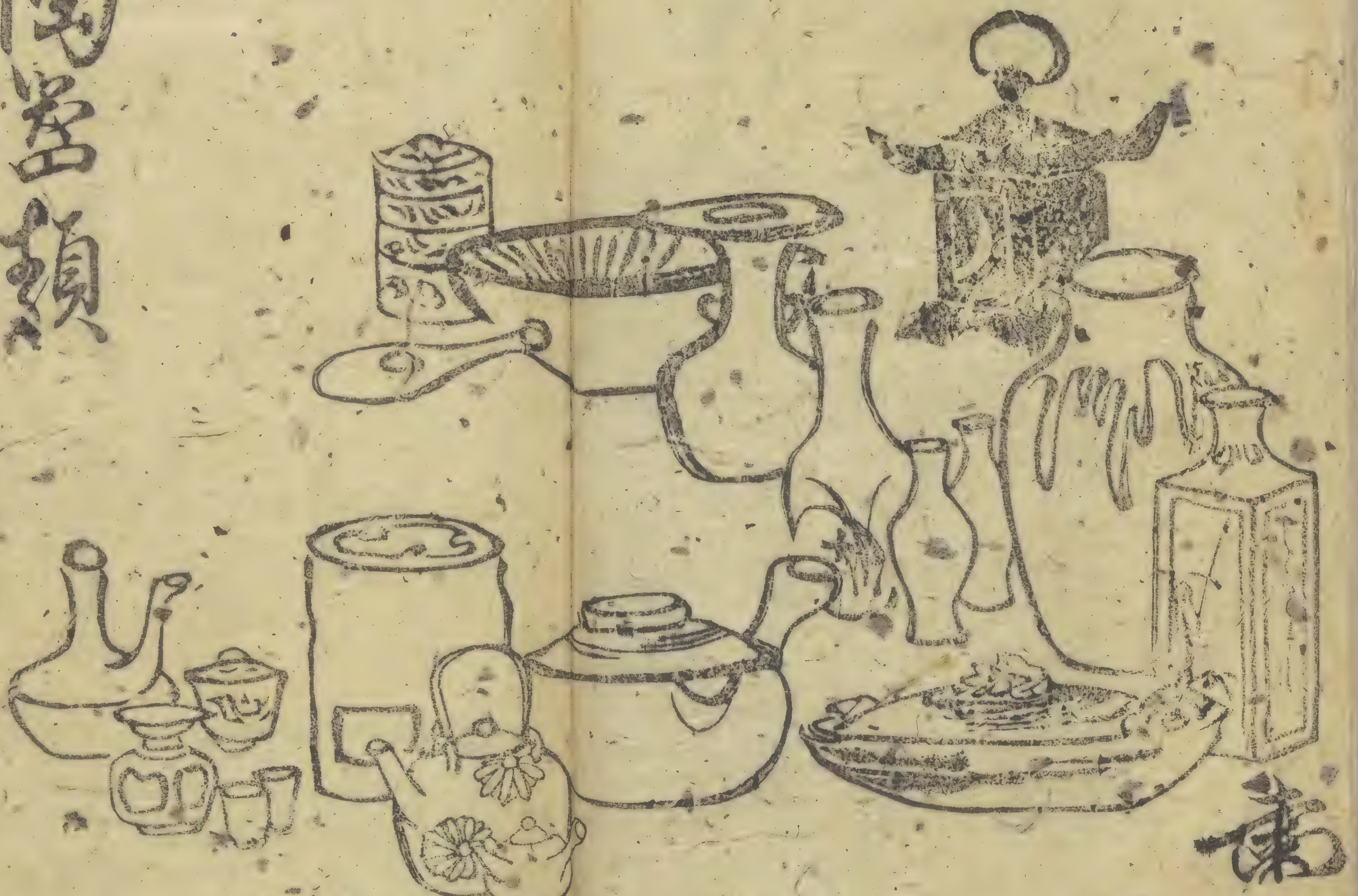
乙丑 暦

九街戸〻五辛新柏酒三朝祝二親最喜小
娘年十二繰毬雙六別占春 子準狂史荻埜雪嶽

陶器類

三條通堀川西入町

植屋喜[illegible]



萬延二年 詠唐

鶴渕　桜井光章

玉ならハかつきや寅む渕の名にのこにすつむ鶴の諸声

八幡森　野呂正基

まちわ未らもうくれてならしや八くゐのまへハ梅の花さく

御射山　佐々木吉雄

田ならし今をはりとゝき山のをなかすむろまその露に

桜瀬　伊呂周祐

咲るこ瀬ハちりにし桜瀬の花にかよ未すく匂のそら

弓矢澤　小西長弘

我人の弓矢の沢に居くしゝて子らにかけあと蛍かよふ

思川　井村守恭

あたよのこれのひ川へぬきとみゝてあつさ午む夏やなつさ半

麻績里　林言方

けハとてうふ衣えちめも桐桜よあさ夜のほをこのはとらむ

蜂名山　北条信賀

秋風の巳にさむくれハむちら名山にはしてそさてる袖のお袖

永代橋　新井政悳

お成といおらぬこら身も橋の名のよこのよの月にいをねるて

姫宮　林言文

木の乃風まろさぬれ姫ゝ家におちな衣を冬々ハ辰らん

高丘　奥村邦秀

西ろきてかきゐうをらにすめるゝ家に冬ゝハ稲子月もさいら侍

育良山　大原正敷

やとし八年にみちれていくらの山道を雪につめれと

萬延二年 辛酉春　名寅さらろ

福

嘉永丑年

當八月廿日ヨリ九日迄

高祖聖人六百回御遠忌 本覚寺

法話 濃州 極善寺

大坂南堀江四丁目

あふえさゆ うつしよみ

天の川　正敷
擬宝珠ちかくミえし和人よ汲ミあけ侍く天の中河

杣山　長世
ぬる中るもの花と書ハめいつくをの山の雪のむら消

大谷森　言方
桜花ちりさは社と風ちくまちつする神のおはしや不

風越山　祁秀
うちそへてまたゆく末ゆきかくまてもしい山ひ秋渡

東野　久臧
思つらし心ゆりしはての野るところねたいきあそやむすぬ

松川　守恭
あきゆのさハ清なきをまつ川の波はいくよの千代ろらむ

笠松山　長弘
風吹さてそ末たさてゆ立ハやそてふきけの笠松のい

熊洞　政悳
秋ハまたあきさ扨られし洞ゆきけハおくある巳祢のまつ風

今宮　言文
来ハいとく笑て成らし神さひく神代の月をいまみやの森

白山寺　周祐
志ら山にころ光そのめ卯つしとぬれその寺にそむる花紫ら

神峯　正基
里人ハ生め酉あへハいそくかる志ら庭つ神のミねのうき雲

砥坂山　光章
ぬるゆきも分あ行らくる戸坂山道あかりとてあさく霞けるかや

野底川　信敬
みそくはさやき流きも氷れるを雨とく年はせ

安政七年庚申春

かきつくる申らと無

覚

一 ……

若松七日町

……

壽月

讃白

鉄粉

大印

大和屋與兵衛

本元

大和屋

安政七庚申

七曜晴雨考

廣江永貞藏板

正札附
無掛直

葛布

一 御上下地
一 御袴地
一 御半合羽地
一 御鞠袴地
一 御肩衣地
一 御馬乗袴地
一 御長合羽地
一 御襖地

右之品々旧来御用向被仰付蒙御贔屓日増
繁昌仕難有仕合奉存候然ル今般相改地性
色合等精々吟味仕直段下直ニ而奉差上候
不寄何事御用向被仰付被下候様偏奉希上候
且当国名物之儀ニ付御用向被仰付候品之儀又ハ
何方迄成共御遠方迄御送り申上候間宜敷御披露
之程奉希上候以上

東海道掛川宿
葛布問屋
一文字屋十蔵

御買上之節為後證以品義ニ而定メ不寄何品ニ而
何時成共御取替可奉申上候

天縁一反織に去る糸十とをの方いに
入る時上下糸数八百筋
一是をおふ巻し　二千二百四拾丈
右横糸八分九匁定　千七百九拾二丈
一立横合して　四千三拾二丈
みすに巻して　四拾万三千二百尋
一曲尺一間ふして　八千四百間
是を六十間一町ふして　百四十町
三拾六町一里にして　三里三拾二丁
右糸車より引出る時一返り二寸延ふして
車のはより数廿万千六百返り目銭
天縁ふ織留のゑに一寸織ふ七千六百二十五
八尺一反ふ付一万九千六百反数也
一元持より織りなげんと月日晶三光の
御蔭御光明の御恵を請て天心の人間
天縁一反に織上げれを冊織中くのなき
ねふ天縁継ぎ合ふ人ども必不足を
それえバ此世絵をおもへ八幡綿
やもおとろぬゆゑ人右ふ不限一切万物
として三光の御恩御恵ふ行ハざるもの
有べからず一日にても御恩礼をお勤
おこたりなく家業勤りのよへバ親先祖
への孝行成べし猶ふ善く諸人の
是を用ひぬりて天の冥加あまねく
子孫長久の基なるべし

施主

悪病除

此度大変ふしきの悪気おこり
る人多ふ害をなし悪風水にうつれ其
毒水となり魚ふうつれて毒魚と
なる是を食する者立所に死すと云
然るに神田明神の社へきこしめの言字
を出つげて曰此なんをのがれん事ハ
家内をさへのきいゑにはりへて
おくべし必災難をのがれらと云
いつくとも無く消うせ行り諸人
助けのため此まもりを知らしむ

悪病除之事

昍圌弱　是ヲ切先枕ニ張

お用ひ
一 生うのシボリ汁をしぼりて用べし
一 へそへこそをきにきゆるを好し
一 ケイシ ヤクチ カンゾウ右三品細末にして 平日用べし

病キヲコリメルセツ

一 ひつき薬アラハ焼酎三ト一合ニテ金生
是ヲのこに入込ミしやの切り
焼酎をぬりつけ身のわりて其
こするべし

某印施

奉擬日本西方四十八願所 名古屋御城下巡拝

一ばん 建中寺
二ばん 相応寺
三ばん くろだ小 自然院
四ばん 平田院

五ばん こ袮り町 貞祖院
六ばん なべや町うら 遍照院
七ばん なべや町うら 誓運寺
八ばん ぜんのうじ前 善光寺

九ばん 高岳院
十ばん こうわんさう 光照院
十一ばん ぜんでら町 東充寺
十二ばん 同 林松寺

十三ばん ぜんちう町 玄周寺
十四ばん するが町 西蓮寺
十五ばん ひさや町 摂取寺
十六ばん ふくろ町かんつう 含輪寺

十七ばん ちやうさく 宝周寺
十八ばん みづ車 蓮華寺
十九ばん いしきり町 光明寺
廿ばん 同 善林寺

廿一ばん 同 善経寺
廿二ばん 同さくら 摂取寺
廿三ばん 同 西光院
廿四ばん 同 法蔵寺

廿五ばん 同 長盛寺
廿六ばん 同 瑞宝寺
廿七ばん 同 法蔵寺
廿八ばん てんま町 徳林寺

廿九ばん てんま町 清安寺
三十ばん もんぜん町 阿弥陀寺
三十一ばん 同 性高院
三十二ばん 同 極楽寺

卅三ばん 七ツ寺
卅四ばん やな 清浄寺
卅五ばん 梅川町 梅香院
三十六ばん 大ばうけ 栄国寺

卅七ばん ひよせ 法然寺
卅八ばん あつたさうや町 雲心寺
卅九ばん 同 養林寺
卌ばん 熱田の御門おあまでら 摂取寺

卌一ばん 内中町 清雲寺
卌二ばん 同 安江寺
卌三ばん 古子町 聖徳寺
卌四ばん 亀井山

卌五ばん 市場 花福寺
卌六ばん そふくめ 高仙寺
卌七ばん てんま町 法林寺
卌八ばん 同 正覚寺

守貼

實母散

さゆう[illegible] 製法[illegible]より
婦一さんぜんさんご血の道[illegible]より
血[illegible]もろもろの[illegible]にて人の[illegible]
男女[illegible]一切によし
[illegible]
[illegible]血の[illegible]一[illegible]
江戸中橋[illegible]通[illegible]

御用

淺草海苔所

日本橋釘店

山形屋惣八

安政四丁巳三月廿四日於上畠裏

晴雨

古稀賀莚

書畫會

會主 淺井星洲

補助

展觀集所

本町二丁目 王屋六右エ門

傳馬町六丁目 京國屋彦兵衛

時ハ嘉永七寅とし九月廿五日の夜
谷中瑞輪寺より三丁室ざき院中において
夜るしみつのころ
いつ迄ともなく
去る家の屋根より
こがきおびたゞしき
其のおとにしをどろき
よくすみればいくし
此石のだるま
これありけるにぞき
よつてわたし右だるを
なりにも借ぞう
おなみ人近辺の人々さん
しよなりし集備の人々
夜ふきいのおもいおもひさうらん
ふしぎなる次第なり

一口香

御用

尾州大野
御一口香所
湊屋温冨

名古屋本町四丁目
岩井屋九秘郎